

■ 社会安全学部・災害心理学研究室(元吉忠寛教授)が調査 ■

## 新しい生活様式に対する実態が明らかに ～ 男性には新しい生活様式の実行がより求められると指摘 ～

このたび関西大学社会安全学部の災害心理学研究室(元吉忠寛教授)は、緊急事態宣言が全国で解除された直後の5月26日から27日に、新しい生活様式に対する行動実態や意識をたずねるインターネット調査を行いました。その結果、「3密を避ける」、「咳エチケット」、「症状がなくてもマスクの着用」などは多くの人が実行している一方で、「家に帰ったときに顔を洗う」「会話をするとき真正面を避ける」などはあまり実行していないという実態が明らかになりました。

本件の  
ポイント

- ・3密を避けている人は83.3%、咳エチケットを徹底している人は80.4%、マスクをしている人は77.2%
- ・30秒の手洗いは59.8%、正面を避けて会話している人は40.8%、家に帰ったとき顔を洗う人は25.1%
- ・男性は女性に比べて新しい生活様式を実行している人の割合が低い傾向が顕著に見られた

本調査は、インターネット調査会社に登録しているモニターのうち、東京都、大阪府、岩手県に在住の成人1,200人(各都府県400人、男女200人ずつ)を対象として実施しました。調査方法は、厚生労働省が公表している新しい生活様式の中から11項目について、それぞれの実行度を5段階(「1.まったくあてはまらない」から「5.とてもあてはまる」)でたずねました。

「3密(密集、密接、密閉)を避けるようにしている」について、「4.ややあてはまる」「5.とてもあてはまる」と回答した人は合わせて83.3%(999人)、「咳エチケットを徹底している」については80.4%(965人)、「外出時、屋内にいるときや会話をするとき、症状がなくてもマスクをしている」については77.2%(926人)となっており、比較的多くの人が実行していることがわかりました。

その一方で、「手洗いは30秒程度かけて水と石けんで丁寧に洗っている」について、「4.ややあてはまる」「5.とてもあてはまる」と回答した人は合わせて59.8%(717人)、「会話をするとき、可能な限り真正面を避けている」については40.8%(490人)、「家に帰ったときに顔を洗っている」については25.1%(301人)にとどまりました。具体的な新しい生活様式が例示されていますが、行動の種類によって実行している人の割合が異なることが明らかになりました。

また、新しい生活様式の実行度については、顕著な男女差があることもわかりました。11項目のうち9項目において、女性の方が男性よりも実行している人の割合が高く、女性の方が新しい生活様式を意識した行動をしていることが明らかになりました。元吉教授は「新しい生活様式を意識しない行動は、再び新型コロナウイルスの感染拡大の可能性を高くする恐れがある。以前の生活に戻るのではなく、感染症リスクとつき合う新しい生活様式が必要であるということをもっと強く認識する必要がある」と指摘しています。

さらに、東京都、大阪府、岩手県の比較をすると、新しい生活様式を実行している人の割合は、東京都が最も高く、大阪府は東京都と比べると少し低くなっていました。新型コロナウイルスの感染者が確認されていない岩手県では、東京都や大阪府と比べるとやや低かったですが、岩手県の人々にも新しい生活様式を実行している人は多いことがわかりました。

詳細な分析結果については、別紙資料にて紹介いたします。

【本件に関するお問い合わせ先】

関西大学社会安全学部 教授 元吉 忠寛 (もとよし ただひろ)

E-mail : motoyosi@kansai-u.ac.jp TEL : 072-684-4160

発信元

関西大学 総合企画室 広報課 担当：寺崎、木田

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 Tel.06-6368-0201 Fax.06-6368-1266

www.kansai-u.ac.jp

# 新しい生活様式に関する 調査報告

関西大学社会安全学部  
教授 元吉忠寛

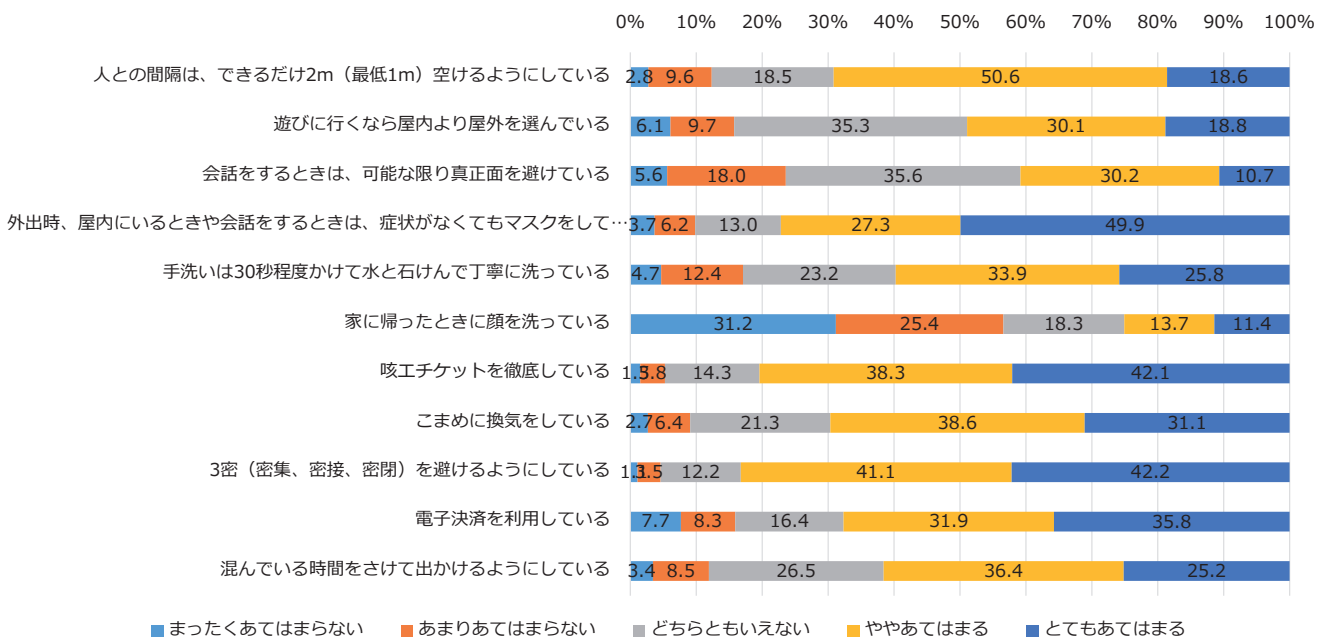
## 調査の目的

- 新型コロナウイルスに関する緊急事態宣言が2020年5月25日に首都圏と北海道で解除され、約1か月半ぶりに全都道府県で解除となった
- 次なるフェーズへ発想を変えていく必要があり、国民には「新しい生活様式」を定着させることが必要とされている
- 人々は具体的な「新しい生活様式」をどの程度実行しているのだろうか

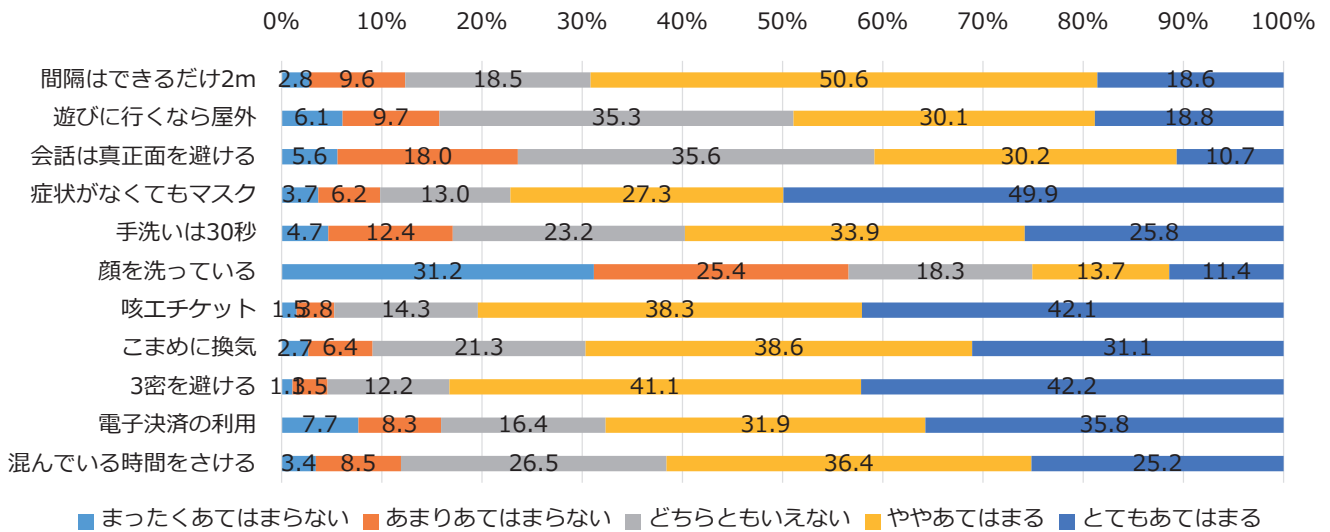
# 調査の概要

- 調査方法
  - インターネット調査
- 調査期間
  - 2020年5月26日から27日
- 調査対象
  - 調査会社のモニター20歳から69歳
  - 東京都、大阪府、岩手県在住の男女各200名、合計1200名
  - 平均年齢46.8歳(SD=11.8)

## 新しい生活様式の実行度



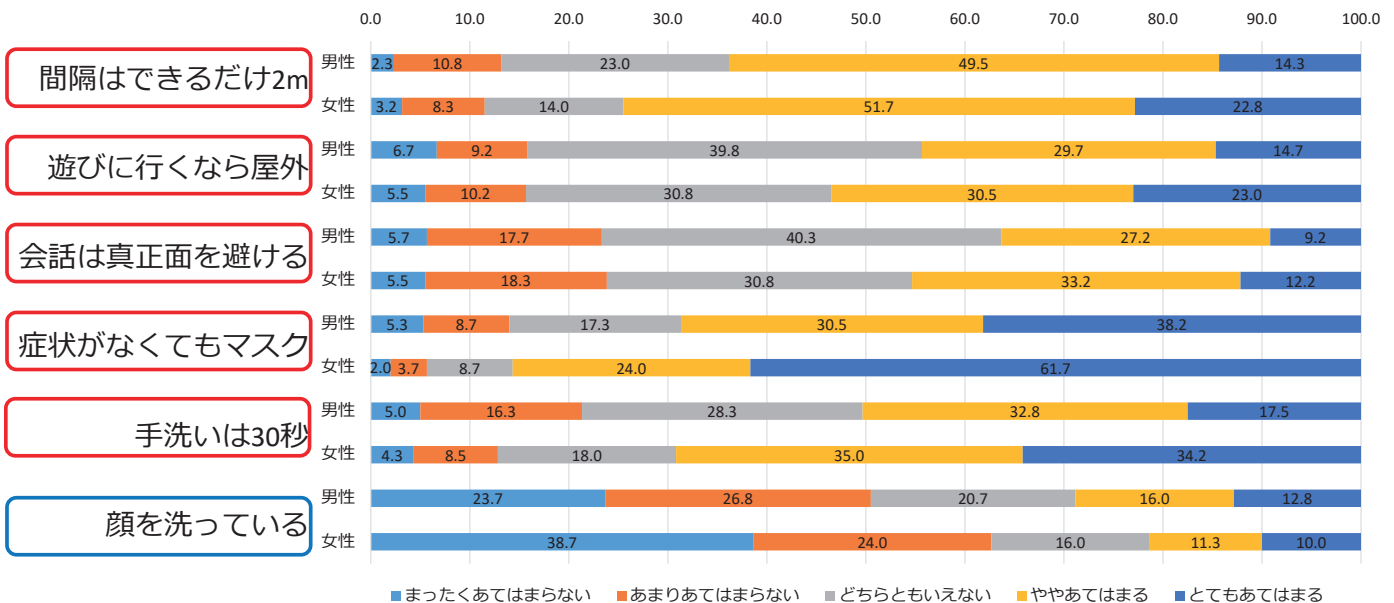
# 新しい生活様式の実行度(ラベルシンプル)



# 新しい生活様式の実行度(男女別)

女性が高い

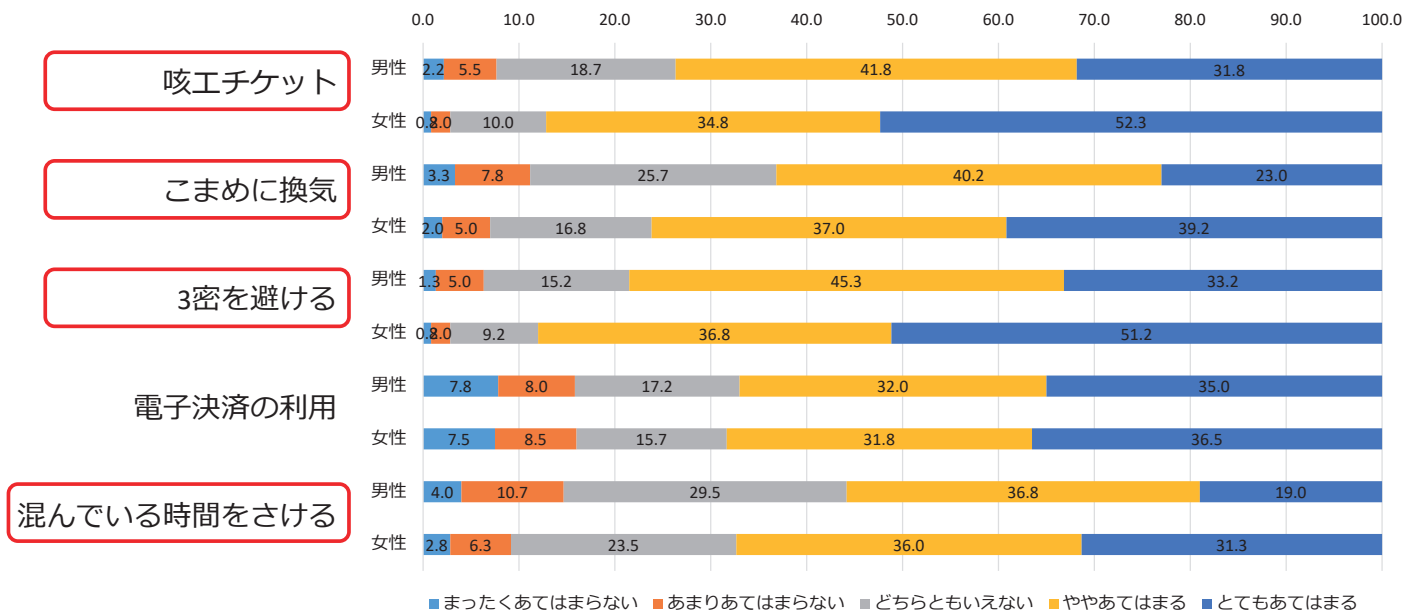
男性が高い



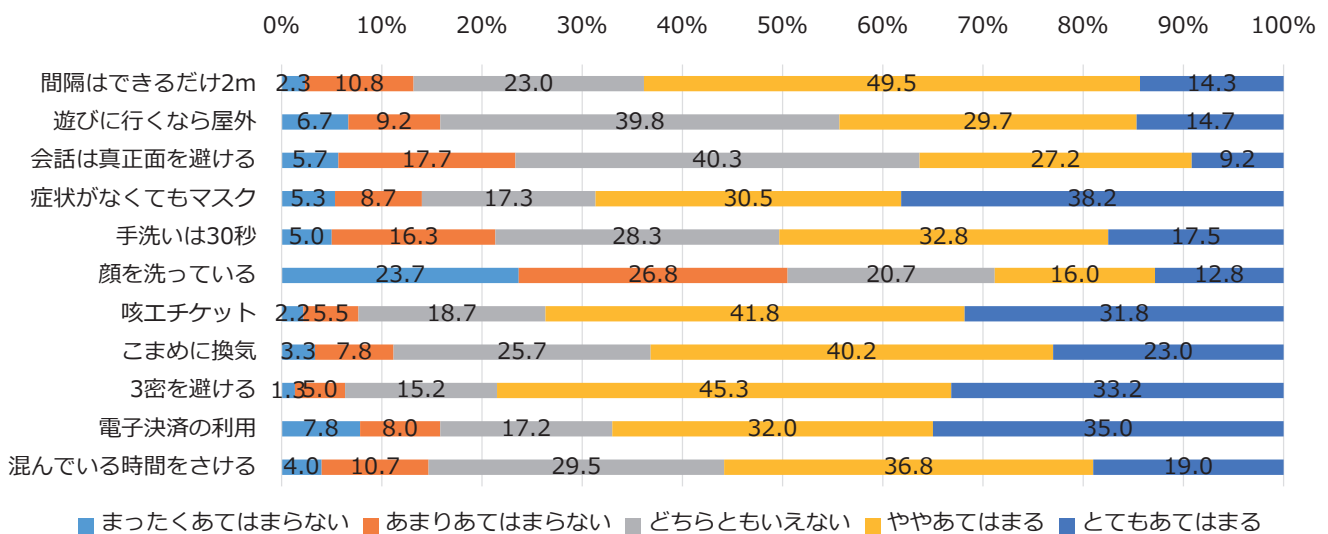
# 新しい生活様式の実行度(男女別)

女性が高い

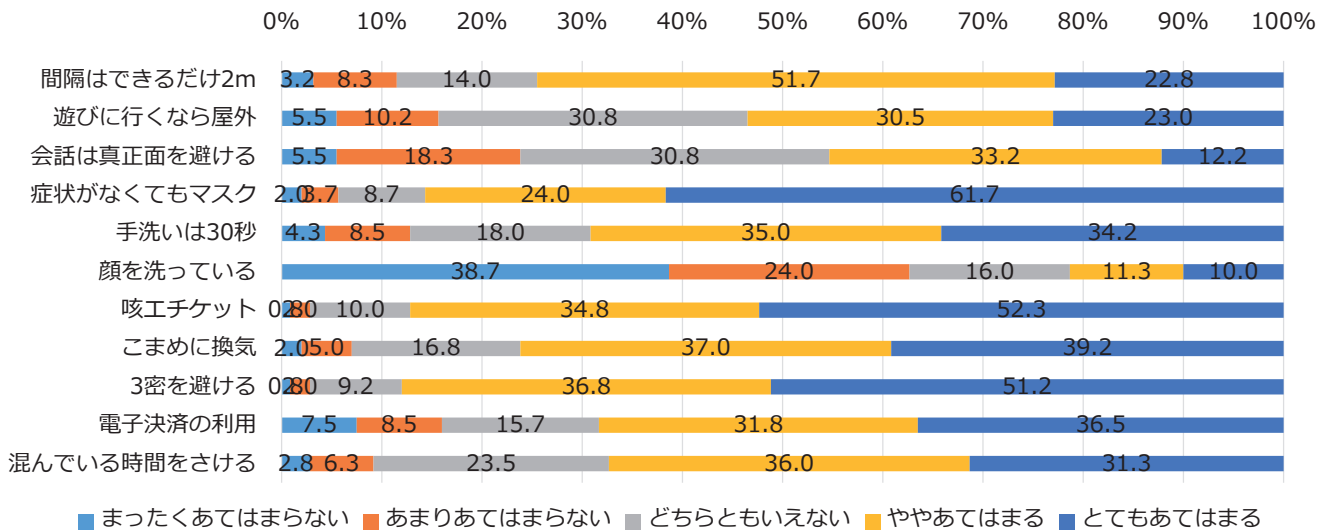
男性が高い



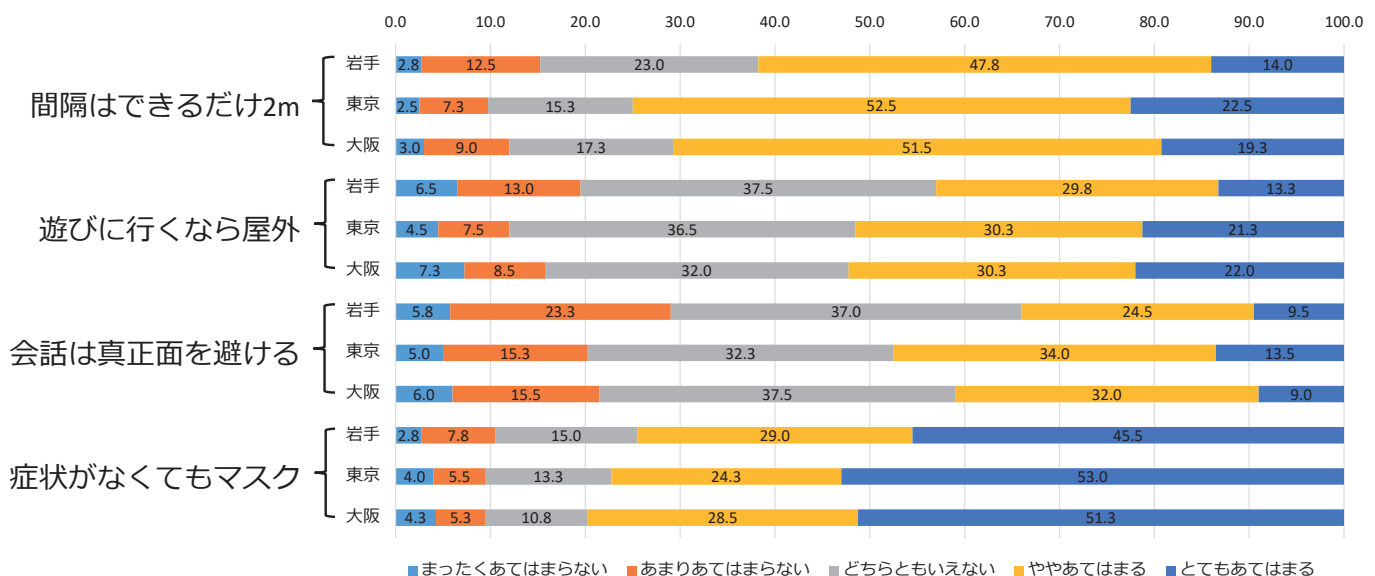
# 新しい生活様式の実行度(男性)



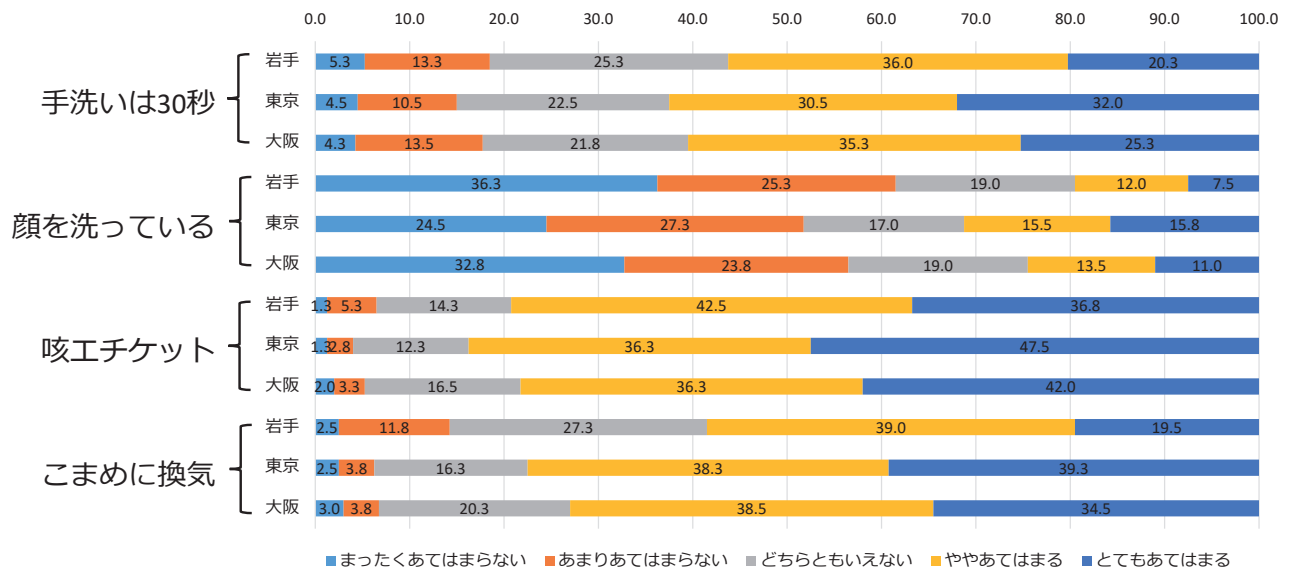
# 新しい生活様式の実行度(女性)



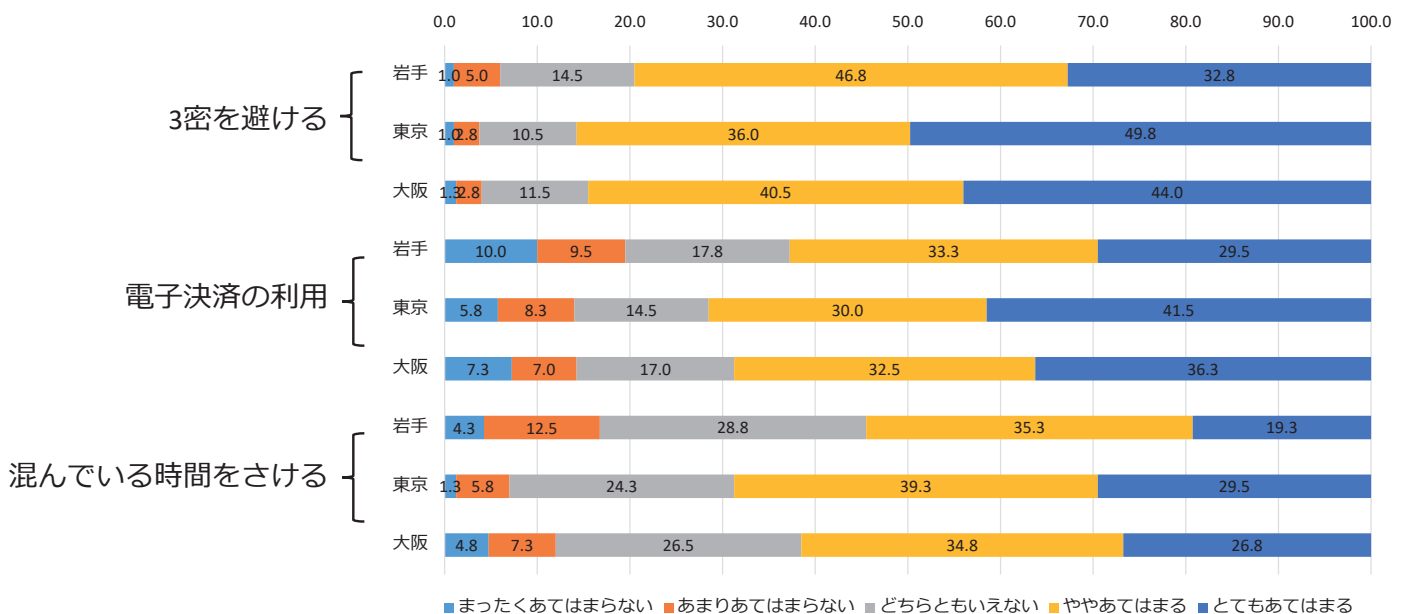
# 新しい生活様式の実行度(都府県別)



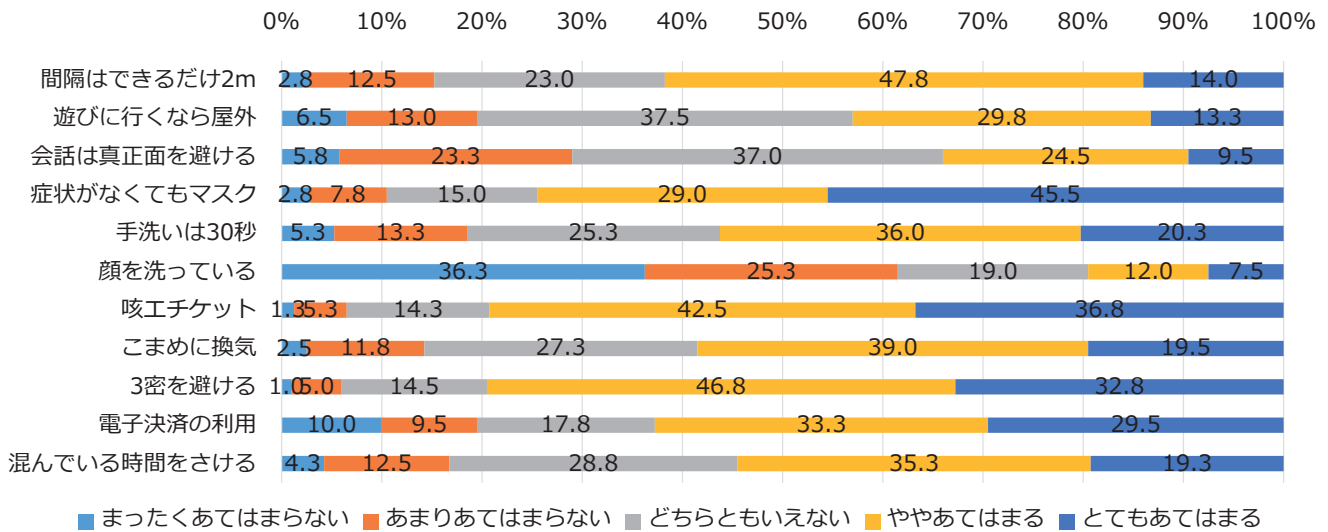
# 新しい生活様式の実行度(都府県別)



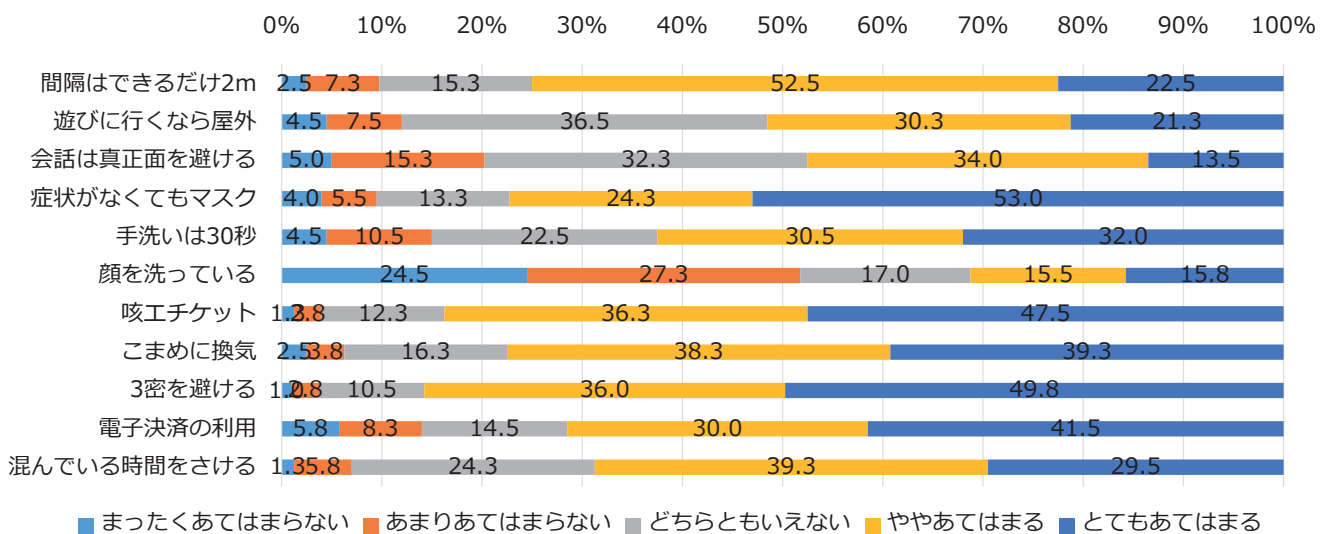
# 新しい生活様式の実行度(都府県別)



# 新しい生活様式の実行度(岩手県)

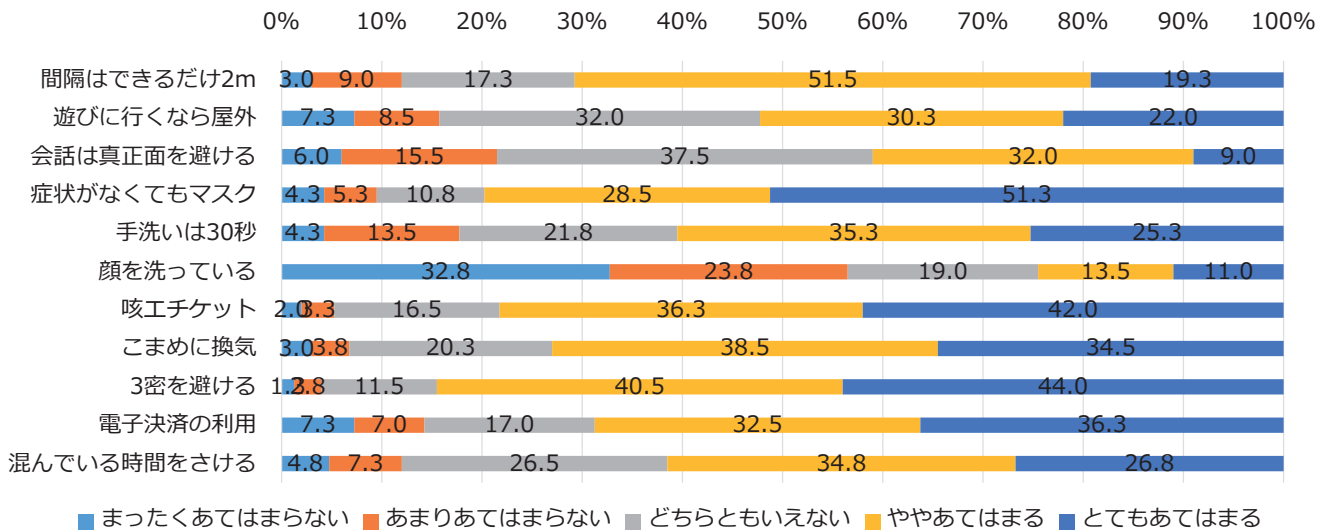


# 新しい生活様式の実行度(東京都)

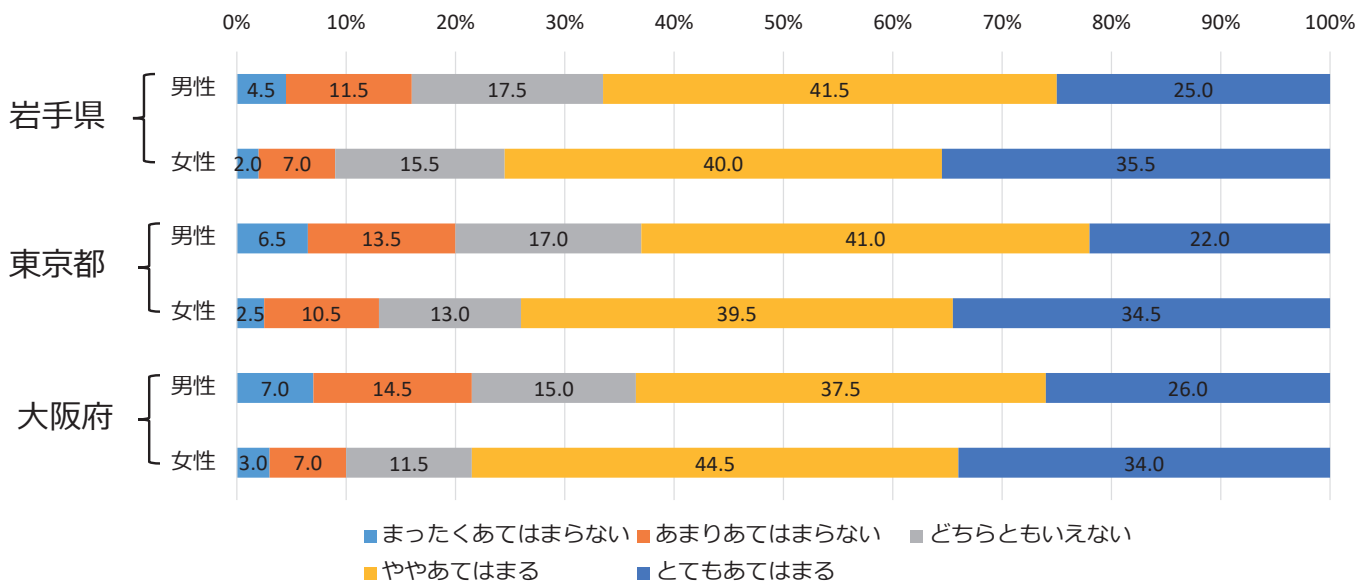




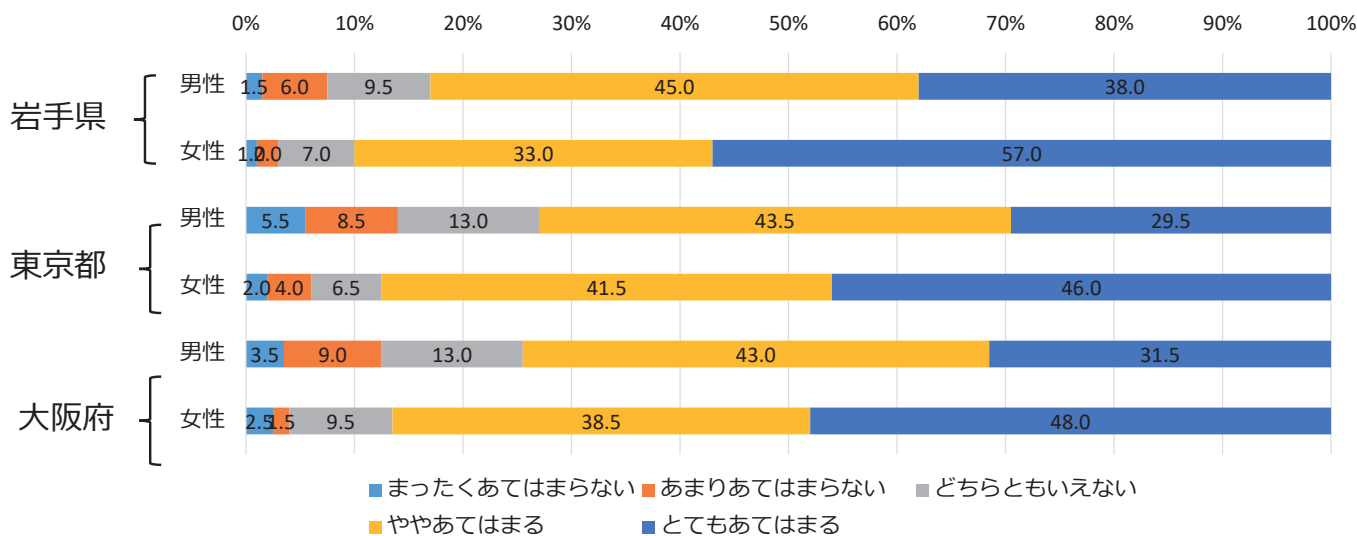
# 新しい生活様式の実行度(大阪府)



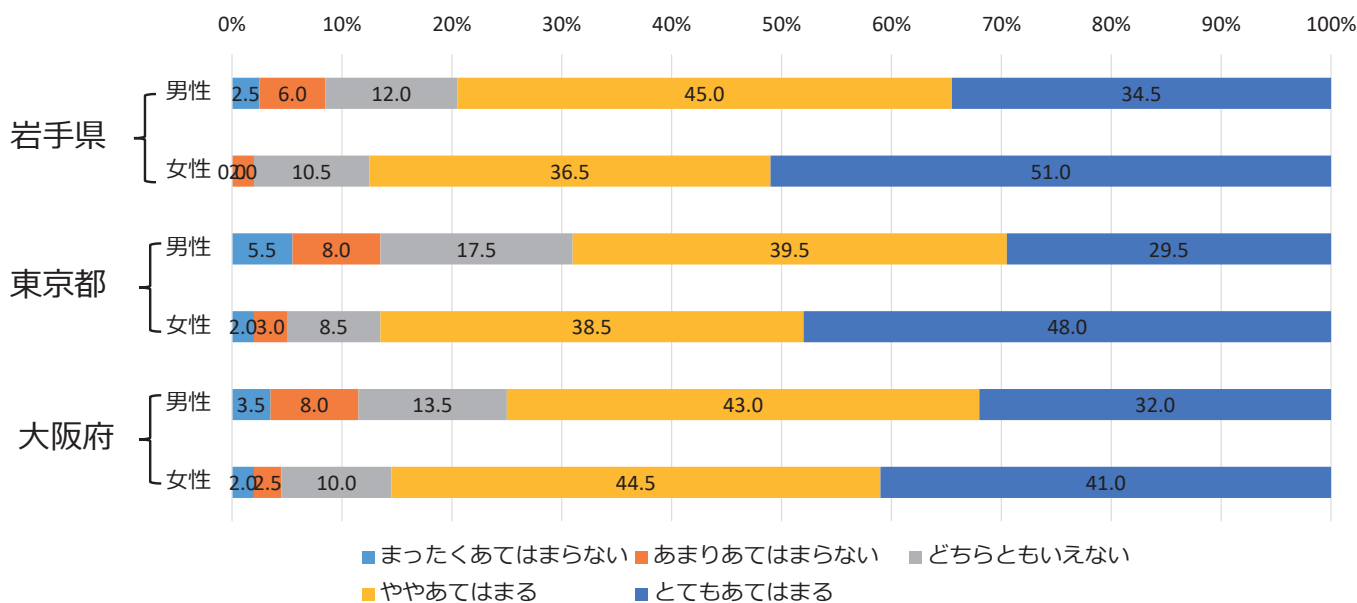
# 自分自身が感染することに不安を感じる



# 日本でウイルスが広がることに不安を感じる



# 第2波（再び感染拡大が広まること）が来ることに不安を感じる



# 新しい生活様式の実行度と意識の関連

	感染不安	ストレス	疲労	嫌悪
実行度	.390	.204	.110	.313

数値は相関係数で、値が大きいほど関連が強い。  
感染の不安を強く感じている人ほど新しい生活様式を実行している  
また実行している人ほど自粛要請に応じない人々に嫌悪を感じていた

## 男性の方が実行度が低い理由

- 不安が高い人ほど新しい生活様式の実行度は高くなっている。
- 全体的に不安は高いが、男性の方が女性よりも「自分が感染する不安」「日本でウイルスが広がることに対する不安」「第2波が来る不安」が低くなっている。
- 不安が緩和してきたことによって、新しい生活様式の必要性を認識しなくなっている可能性がある。
- 感染の不安を感じるかどうかにかかわらず、新しい生活様式を習慣として日常生活の中に取り入れられるかが今後の鍵。